

1. 日程

- 8月26日（火）10：05 羽田発（NH855）ジャカルタ経由で 19：40 ジョグジャカルタ着（GA216）。
（副センター長、坂本恵氏・センター兼任教員、降幡正志氏と合流。以下の調査は基本的に3人合同で実施した。）
- 8月27日（水）**ガジャマダ大学人文学部日本語・日本文学科訪問**。ステディ・ワルドヨ学科長、教員のヤヤン・スヤナさん、アティックさん（大学院研究生として本学に在籍中）、日本人講師、浜元聡子さんと懇談。その後、在学生と懇談。
- 8月28日（木）GA205 便にて、ジャカルタへ移動。11：25 ジャカルタ着。
ジャカルタ公立第18高等学校訪問。唯一の日本語教員、エウイスさん（かつて教員研修生として本学で研修）を中心に、副校長ほか教員の方々、隣の高校の日本語教員ティさんと懇談。エウイスさんの教える日本語の授業を見学。
- 8月29日（金）**インドネシア大学人文科学部日本研究科訪問**。副学科長のデウィ・アングラエニ・レニさん、日本文化研究センターの副センター長を兼ねる教員のレア・サンティアさん、教員のヒマワン・プラタマさん（かつて本学に留学していた）と懇談。
ダルマ・プルサダ大学文学部日本語学科訪問。学科長、ハルゴ・サブタジさん、国際産学官民連携推進センター所長のエコ・チャヨノさん、同副センター長兼海洋工学部講師の宇田直史さんと懇談。オロアン・P. シアハアン学長（第一期インドネシア賠償留学生で、京都大学で博士号を取得）を表敬訪問。
- 8月30日（土）**ジャカルタ・コミュニケーション・クラブ**（日本語及びインドネシア語を教える民間の語学学校）訪問。副校長の渡辺彰吾さん（本学日本語教育学特化コース修了生）、大学生による日本語劇団、En塾指導者の甲斐切清子さんにお話をうかがったあと、En塾塾生によるミュージカル「東京ライク・ストーリー」鑑賞。
- 8月31日（日）NH856 便（21：25 ジャカルタ発）にて帰国（9月1日7：10 羽田着）

2. 教育機関訪問の記録

2-1. 国立ガジャマダ大学人文学部日本語・日本文学科訪問



8月27日（水）。インドネシアの古都、ジョグジャカルタのガジャマダ大学を訪問。人文学部日本語・日本文学科を訪ねた。

学科長、ステディ・ワルドヨ先生、
日本語教員、ヤヤン・スヤナ先生
日本人教員、浜元聡子先生
日本語講師で本学留学生でもある アティックさん
とお会いし、当学科における教育についてうかがった。

スタッフは専任の公務員教員は 11 名。非常勤講師が 1 名、日本人教師 1 名、職員 1 名。
 教員の専門は、日本語、日本文化、日本文学、歴史学、一般言語学、社会言語学、比較言語学などに及び、学生数は 1 学年の定員が 30 名、現在在籍学生は全体で 218 名ということである。

【学科の目標、カリキュラム】

- はば広く「日本学」、つまり日本の歴史・文化・精神を教える。(日本語を教える語学学校ではない。)
- 言語、文学、文化、歴史の各分野と関連分野について、広い基礎知識を身につける。
- 社会で対応できる問題解決能力、国際化社会で活躍できる人材育成を目的とする。

【学科のポリシー】

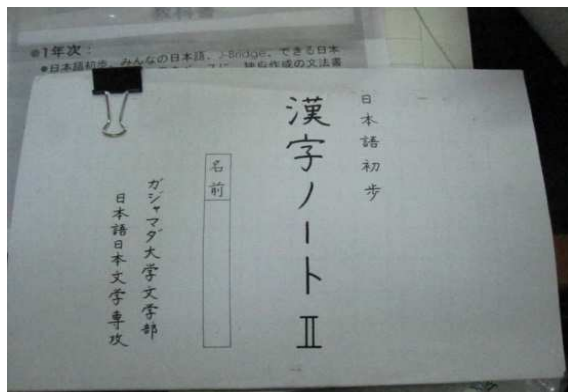
- 1 年次と 2 年次に日本語の 4 技能(読む・書く・話す・聞く)を集中的に総合的な Team Teaching で教え、3 年次以降には日本語力を延ばすための発展的な授業を設置している。
- 卒業まで日本語能力試験 2 級を受験した証明書を提出する。

【必修科目】

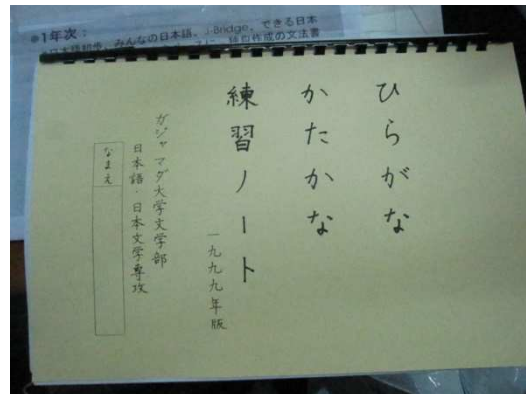
大学必修科目 9 単位：宗教,道徳,学外社会奉仕活動

学部必修科目 12 単位：文化学入門,英語,インドネシア文化,インドネシア語

日本語学科必修科目 92 単位：文法Ⅰ～Ⅵ,聴解・会話Ⅰ～Ⅵ,漢字Ⅰ～Ⅲ,作文・読解Ⅰ～Ⅴ,日本事情,多文化理論,日本研究入門(言語・文学・歴史・文化),論文ゼミ,卒業論文,インターンシップ



ガジヤマダ大学で独自に作成した漢字教材



同、かなの練習用教材

ほかにもガジヤマダ大学では、教員のみなさんが、日本の教科書類をも参考にして独自の文法教科書を作成して授業に用いている。卒業までの具体的な目標は以下のように設定されている。

1.知識

日本の言語学、歴史、文学と文化の理論と研究方法を理解する。

文献の理解と翻訳の原理を理解する。

日本文学、歴史、言語、社会構造を理解する。

2.知的能力

問題を認識し、分析して解決策を提示する。

研究や適切な代替案に基づいて意思決定を行う。

3.実用的なスキル

さまざまな状況に対応できる 4 技能(話す、読む、書く、聞く)

日本の言語、文学、歴史と文化研究の理論と方法を適合する。

4.経営能力

多様な利害関係や様々な分野の関心を持つ人々によって構成されたグループで協働プロジェクトを運営する。

調査と分析の結果を情報交換する。

＊卒業までに日本語能力試験 N2 合格が目標。



ステディ・ワールドヨ先生、ヤヤン・スヤナ先生、アティックさんと今回訪問メンバー（降幡、坂本、河路）

卒業生の進路をうかがうと、60%は民間企業に就職する（旅行会社、貿易会社、人材派遣会社、語学学校など）ということである。公務員に人気があり、約20%が公務員になる（高校教員を含む）。国営企業は約7%（石油会社、銀行など）で、残りは自営業（通訳・翻訳を含む）。

このあと、ガジャマダ大学で日本語を学ぶ学生（3年生になったばかりの女子学生4人）と話す機会を得た。

4人とも、日本のアニメが好きで、それが日本語に関心をもったきっかけだという。



ドラえもん、進撃の巨人、ほか日本のアニメに親しんでいる。特にドラえもんには小学生のころから親しんでいた。バイクでの通学者が多く、構内にはバイクがたくさんとめられている。4人のうち2人はバイクで通学しているということだった。

将来の夢は、大使、日本の小説の翻訳家、大学院でもっと勉強したい、など。

日本の文化で好きなものは、書道、マンガ（自分でも描く）、日本の踊り、日本の女性歌手ユイの歌 など。

2-2. ジャカルタ公立第18高等学校訪問

翌8月28日（木）飛行機でジョグジャカルタから1時間余りで首都ジャカルタに着く。以前、本学で教員研修生として学んだ経験を持つエウイスさんのお迎えで、その勤務先であるジャカルタ公立第18高等学校を訪問した。第18高等学校で日本語の教師はエウイスさん1人。



(左の写真)

ジャカルタ公立第 18 高等学校の校舎。
校庭では生徒たちがスポーツに励んでいる。
(その下の写真)



ジャカルタ公立第 18 高等学校の会議室にて、
副校長、坂本、エウイスさん、河路、降幡。
撮影者は、隣の高校の日本語教師テディさん。

の高校の日本語教師で、エウイスさんの大学時代（ダルマ・プルサダ大学）の後輩にあたるテディさんも来てくれた。まずは会議室で、副校長先生以下、諸先生方とお話し、この学校での日本語教育の様子などをうかがう。選択の外国語は学校の方で定める。現在は 1 年生と 3 年生は日本語。2 年生はドイツ語である。その 1 年生と 3 年生の日本語をすべて、1 人の教員が担当している。その授業数をうかがうと、次の通りだということであった。

理科系	1 年生 3 クラス	1 週間に 1 回 × 3 コマ	9 コマ
言語系	1 年生 1 クラス	1 週間に 2 回 × 2 コマ	4 コマ
ほかに、	3 年生（入門レベル）	にも 1 週間に 2 回 × 2 コマ	4 コマ



午後、エウイスさんの担当する日本語の授業を 1 コマ、見学した。入学間もない言語系 1 年生の授業で、エウイスさんは異なるクラスで朝から授業をして、午後のこの授業が今日の最後の授業だということであった。クラスの生徒数は 42 名。教材は、日本の国際交流基金が開発したビデオ教材、「エリンが挑戦 日本語できます」を使用。まず、「はじめまして、〇〇です。〇〇から来ました。どうぞよろしくお願いいたします」という自己紹介の場面の映像を見せて、カードを使っのりピー練習、教室全体での練習、

半分ずつの練習、そして、一斉にペア練習。そのうちの一部に発表させる、という一連の流れは大変スムーズで、効率のよい授業であった。生徒たちは楽しそうに参加していた。



最後に、我々がよばれて挨拶、話をし、生徒からの質問を受けることになった。主要部分はエウイスさん（時に、降幡先生）の通訳によるが、「はじめまして…」の部分は早速活用。質問者は前へでてきて「はじめまして」と挨拶をしてペコンと頭を下げる。主な質問は「インドネシアをどう思うか」「どうしてこの学校に興味をもったのか」「インドネシアの高校生と日本の高校生の違いはなにか」など。坂本、降幡、河路が答える。インドネシアの食べ物、気候、パティックが好きだということと歓声

があがる。最年少者は2000年生まれの14歳ということ。通常は15-17歳だが、早めに教育を開始した子どももいるからだという。



終わると再び会議室へ。副校長より授業へのコメントを求められる。全体に教育への姿勢が真摯である印象を受けた。東外大での教員研修を経て、自信をもって活躍しているエウイスさんの姿に接することができ、その帰国後の活躍の様子を見ることができたのは貴重な経験であった。エウイスさんが恩師坂本先生との再会を喜ぶ姿も印象的であった。

高校の始業は朝6時で、通勤に1時間半かかるエウイスさんは、毎朝3時半に起床していると聞いた。学校の仕事を終え、生徒の提出物を見て（今はひらがな）就寝するのは12時とのこと。高校日本語教師の日常は厳しいようである。夜、数百人分におよぶ漢字テストの採点などすることもあるという。

2-3. インドネシア大学人文科学部日本研究科訪問



8月29日（金）午前中、国立インドネシア大学人文科学部日本研究科を訪問した。

対応してくださった方は
副学科長のデウィ・アングラエニ・レニさん、
併設の日本文化研究センターの副センター長を兼ねる日本語教員
レア・サンティア先生
東外大に留学経験のある日本語教員
ヒマワン・プラタマ先生

文学部日本語学科の担当教員は全員で27名。うち専任教員が13、非常勤教員が12、日本人ボランティア2名の構成である。特徴的なのは非常勤講師に退職した教員が多く含まれるということである。10年間新規採用ができなかったため、教員不足が深刻で、定年退職した教員がそのあと非常勤講師として教え続けているのだという。

学生定員は1学年約90名。現在の全学生数は379名ということである。

定年退職された先生も途中、話し合いのテーブルにつかれた。

エルマ・マンダー先生とダリシュハ・マンダー先生は姉妹。ほかにシムラ先生。1970年代に東外大にきて阪田雪子先生や鈴木忍先生に教えを受けたことがあると言う。ほかにも数名、そうした古い先生方が来て日本留学時代の思い出を聞かせてくださったたりした。



インドネシア大学にて。
左から、マンダー姉妹のお二人、
河路、坂本、レア先生、シムラ先生、
レニ先生、ヒマワン先生。

インドネシア大学人文科学部日本研究科の学習目標、必修科目などは次のとおりである。

【学習目標】

日本語を話すこと、書くことの両方に習熟し、日本の歴史・文化。社会を説明することができる。理論的に思考し、分析し、日本文化の意義、日本文学・言語学の特徴を語るすることができる。

日本における現象（昔と今）、多様な社会と文化を理解し、責任をもってそれを応用することができる。日本語は、日本語能力試験 N2 合格が目標（ただし、受験を義務づけているわけではない）

【必修科目】（カッコ内の数字は単位数）

1 年次前期：日本語Ⅰ（４）、日本事情（３）、日本の歴史（３）

後期：日本語Ⅱ（４）、日本文化（３）

2 年次前期：日本語Ⅲ（４）、日本文学（３）、形態論（３）、日本の地理と観光（３）、日本近代史（３）

後期：日本語Ⅳ（４）、統語論（３）、日本の演劇（３）、日本の思想（３）、日本における社会文化理論

3 年次前期：日本語Ⅴ（４）、日本の散文（３）、記号論（３）、日本交流史（３）、日本の人生観（３）

後期：日本語Ⅵ（４）、日本の詩歌（３）、翻訳（３）、読解（３）、日本現代史（３）

4 年次前期：翻訳（３）、手紙の書き方（３）、新聞読解（３）、日本のグローバル化（３）

後期：卒業論文

使用教科書は、日本で作成されたもので、1 年次～2 年次は『みんなの日本語初級』、2 年次～3 年次は『みんなの日本語中級』『中級から学ぶ日本語』『J-Bridge』など。

インドネシア大学にはインドネシアのトップクラスの学生が集まる。卒業生はさまざまな分野で活躍しており、毎年 1～2 人は外交官になるとのことで、大学院への進学者は少ない。進路は大学には届けることになっているが、学科ではその結果を把握していないということであった。

2-4. ダルマ・プルサダ大学文学部日本語学科訪問



同日（8 月 28 日）午後、ジャカルタ西部のダルマ・プルサダ大学を訪問した。ダルマ・プルサダ大学は東京外交後大学の交流協定校ではないが、インドネシアと日本の交流史の中で異彩を放つ私立大学であるため、今回の訪問先に加えた。元日本留学生が中心となり、その経験を母国の発展に生かすために設立された大学は世界的にも非常に珍しい。

ダルマ・プルサダ大学は 1986 年にインドネシア・日本友好協会（PPIJ）とインドネシア元日本留学生協会（PERSADA）が協力して設立された。戦前・戦中・戦後の元日本留学生が中心となり、その経験を母国の発展に生かそうとし、また、インドネシア・日本両国への感謝の証として設立した。歴代の学長のほとんどが日本留学経験者である 5 代目にあたる現在の学長、オロアン・P. シアハ

アン博士は、戦後の第一回賠償留学生として日本に留学し、国際学友会で日本語を一年間学んだ

あと、京都大学・同大学院で金属工学（冶金）を学び、修士号を取得。工業省勤務を経て、産業界で活躍してきた方である。



文学部日本語学科の元学科長のハリ・スティアワン氏は、本学の日本語教育学専修コースの修了生で、現在博士課程への進学準備中でもある。

今回、対応して下さったのは、ハルゴ・サブタジ先生（日本語学科の学科長）

宇田直史先生（海洋工学部専任講師、国際産学官民連携推進センター副所長、インドネシア日本友好協会アドバイザー）

お二人にダルマ・プルサダ大学の日本語教育、日本との交流事業等についてうかがった。そのあと、エコ・チャヨノ先生（副学長、国際産学官民連携推進センター所長）のご案内で、かねてお会いしたかったオロアン学長にお会いし留学時代の思い出をふくめてお話をうかがうことができた。写真は、学長室にて。左からハルゴ先生、宇田先生、坂本、河路、オロアン学長、降幡、エコ先生。

文学部日本語学科の1学年の定員は200名。総学生数は約800名。教員は専任が6～7名で、非常勤講師が約40名。非常勤講師の40名のうち7名が日本人教師である。20年以上にわたって貢献し、その功績に対し外務大臣賞が与えられた教師もいる。日本から教師を招くのは費用等の点で難しいので、インドネシア在住の日本人に依頼することが多いが、2014年6月から日本財団のシニア海外派遣プロジェクトによる日本語教師有資格者のボランティア受け入れが始まった。

文学部のほかに、工学部・海洋工学部・経済学部があり、文学部にも日本語学科のほか英語学科、中国語学科があるが、すべての学生にとって英語と日本語は必修とされている。全学生約2400名が全員、日本語を学んでいる。また、3年制の短期コースもある。働きながら学ぶ夜間のコース、土曜日だけのコースもある。こうした学生は働きながら学士の取得を望み、努力する人の中にはN2合格者もいる。

大学全体として、日本の「ものづくり」の精神を学ぶことを目標に掲げている。ディプロマコース日本はN4の日本語の習得を目指し、観光、オフィスの世界で通信するため、特に能力を持つ中間専門家や熟練した専門家を発生させることができる主要なプログラムの一つである。具体的な目標は以下のとおりである。

- ・統合された方法でトライダルマ組織高等教育を行う。
- ・協力的な学術環境の品質改善トライダルマ大学を作成する。
- ・雇用市場を満たすために、高い能力を持つ人材を、高度な学習システムを通じて育成する。
- ・特に観光とオフィスの日本語会話スキルのコースを開発する。
- ・研究のプログラムのビジョンの達成を加速させるための努力において、国内外の他の関係者との互惠協力関係を築く。

・タスクの開発、特にビジネスや観光のオフィスの分野では、翻訳（口頭および書面の両方）の分野で学術的言語教育、スキルを教える。

前述したとおり、日本語・英語は必修である。工学部・文学部において日系企業へのインターンシップを現在は選択科目として実施しているが、将来的には受け入れ先企業を拡大し、必修化したいと考えているということである。全学部全学科の必修講座として、2014年9月よりHIDA（海外産業人材育成協会）の協力の元、日本式の「ものづくり」精神を持った産業人材を育成するプログラムを実施している。

日本語の目標としては、日本語学科の全学生がN2に合格することが目標。（しかし、現実的には日本語学科でもN2合格者は10%ほど。N3が普通である。日本語学科以外で2年間必修科目として学ぶ他専攻の学生はN5も合格できないのが普通であるが、独学で補ってN3に合格する人もいる。）日本語学科以外の学生は全員N4に合格することが目標であるということである。

日本語学科では1年次は『みんなの日本語1・2』、2年生は、『A New Approach to Elementary Japanese テーマで学ぶ基礎日本語〈vol.1〉 〈vol.2〉』、3年生は『読解入門』を教科書として使っている。

卒業生は中等教育機関（高校の日本語教師になる人が多い）、専門機関、政府機関、民間機関、秘書、広報、ツアーガイドなどのさまざまな機関で働いている。日本企業への就職も多い。

今回第18高校を訪問した際にお会いした高校の日本語教師2名も、ダルマ・プルサダ大学の卒業生であった。

日本との交流は深く、日本の皇族や政府要人もインドネシア訪問の際には、多くがダルマ・プルサダ大学を訪れている。

2-5. ジャカルタ・コミュニケーション・クラブ (En 塾) 訪問

8月30日（土）は、ジャカルタ市内のジャカルタ・コミュニケーション・クラブを訪問した。



日本語及びインドネシア語を教える民間の語学学校である。副校長の渡辺彰吾さんは、本学日本語教育学特化コース修了生で、そのお世話で訪問が実現した。同校は、本学インドネシア語専攻の学生の短期留学先としても機能しており、たまたま留学中であった2年生の学生にも会うことができた。

左の写真は、同校の入口で。左より降幡、河路、坂本、本学2年生で短期留学中の野沢さん、渡辺彰吾副校長。

ジャカルタ・コミュニケーション・クラブは、大学生による日本語劇団、En塾の拠点ともなっており、その指導者の甲斐切清子さんにもお話をうかがった。そのあと、En塾塾生が私たちのために30分ほどの短編ミュージカル「東京ライク・ストーリー」を演じてくれ、インドネシアの大学生たちの演ずる日本語によるミュージカルを鑑賞することができた。En塾は2014年4月には日本公演を実現している。東日本大震災のときに彼らが歌った日本応援歌「さくらよ」は、安倍首相を感動させたことでも有名である。塾の講演パンフレットには安倍首相も文章を寄せている。4月の訪日に際しては安倍首相を表敬訪問している。



ジャカルタ・コミュニケーション・クラブは、この劇団の稽古場でもあり指導の拠点となっているほか、一般向けの日本語教育の講習なども行っており、日本との交流事業、インドネシアの日本語教育においてその活躍において際立っている。

上野の写真は、ミュージカル「東京ライク・ストーリー」のアンコールにこたえて、En

塾のメンバーが見せてくれた最新の日本語ミュージカル「バックトゥザ戦国！」の一場面。侍に扮した袴姿の青年達が日本語で歌い、踊った。

3. まとめ

2012年度の国際交流基金の調査によると、インドネシアは海外の日本語学習者数において中国に次いで世界で二番目の日本語学習大国である。インドネシアにおける本学の交流協定校は、AA研の部門別協定の2機関を除くと、ジョグジャカルタのガジャマダ大学と、ジャカルタのインドネシア大学の二大学である。

今回の訪問先にはまずこの二大学を定め、それに加えて、日本との交流において際立った特色をもつダルマ・ブルサダ大学を訪問先に加えた。前の日本語学科長のハリさんが、本学の日本語教育学専修コースの修了生で、連絡をとってくれたおかげで実現した。

さて、インドネシアが日本語学習大国である主たる理由は、中等教育における学習者が多いことによる。インドネシアでは高等学校で広く日本語教育が行われているのである。今回は、教員研修生として本学で学んだ経験をもつ教員を擁するジャカルタ公立第18高校を訪問し、高等学校における日本語教育を実地に見学することができたのは大きな収穫であった。

それから、民間の語学学校であるジャカルタ・コミュニケーション・クラブ、その系列の日本語のミュージカル劇団であるen塾を訪ねることができたのは、同校の副校長が、本学日本語教育学特化コースの修了生であったからである。

交流協定大学以外の、諸機関を訪問できたのは、いずれも本学で教育を受けたことのある修了生がそれぞれの機関で活躍していて、便宜をはかってくれたことによるのである。本学を巣立った修了生の活躍ぶりを実地で見ることができたのは、教育に携わるものにとって喜びの多いものであった。

それぞれの機関では、若い学習者たちが熱心に日本語を学び、スタッフはその教育に真摯に当たっている様子がわかった。また、インドネシアでは日本企業の誘致は盛んに行われており、交流はさまざまな場面で奨励されている。日本との交流に於いて、日本語教育において、今後ますます重要になっていく地域であることが実感された。